

サルトルは日本でどのように受容されたか ——その黎明期を中心として——

増田 靖彦

論文要旨

サルトルが日本に受容されるに当たっては、いくつかの困難が存在した。彼の多様な執筆活動に対応しきれない日本のアカデミズムの構造や、第二次世界大戦という世界の特殊な状況などがそれに当たる。

そうした困難を克服しつつ、サルトルの受容はまず作品の素描や翻訳から始まった。その蓄積はやがて、サルトルの作品を総体として論じる試みとなって現れる。その嚆矢となったのが、サルトルをフッサール現象学に基づいた自我の問題提起として読解する研究であり、自己と他者の関係を基礎付ける人間学として読解する研究であり、今日人類が抱える思想的課題と格闘する文学者として読解する研究であった。これらの研究はいずれも、サルトルの思想家としての側面に焦点を当てていることが特徴的である。

しかし、サルトルの作品における形式及び内容の変化と、行動する知識人というイメージの流布とによって、そうした研究動向にも転換の時期が訪れる。日本におけるサルトルの受容はもっぱら実存主義者サルトルを前面に押し出すようになっていくのである。

キーワード【ジャン＝ポール・サルトル 現象学と自我 人間学 象徴主義と実存主義 行動する知識人】

はじめに

ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul SARTRE, 1905–80) は様々な方面への文筆活動で知られる人である。周知のように、彼が最初に著したのは『想像力 (*L'imagination*)』、『自我の超越』という哲学論文であった。しかしそのあとは、『情緒論粗描』と大著『存在と無』を挟むものの、それに劣らず『壁』、『嘔吐』といった小説、あるいは戦後『シチュアション I』に収録されることになる諸々の文学論〔文芸批評〕、さらには『蠅』、『出口なし』といった第二次世界大戦中における彼の名声獲得に大きく寄与した戯曲の発表も目立つ。こうした多分野への参与は、彼の仕事にアカデミックなアプローチを試みる者にとって、どこに読解の補助線を描いたらよいかの判断をしばしば迷わす要因となってきた。

もっとも、ただちに確認しておきたいのは、このようなあり方は決してサルトルに固有の現象ではないという事実である。西洋の思想史全体に照らしてみれば言うに及ばず、近代のフランスに限ってみても、古くはパスカルや啓蒙主義時代の思想家たち〔ヴォルテールやル

ソーなど〕から、サルトルが青年期を過ごした20世紀の初頭におけるアラン、ヴァレリーに到るまで、狭義の意味での文学と哲学の境界をトランス〔横断、越境、逸脱〕しながら活躍した人は少なくない。

ところが、こうした事情は日本のサルトル受容に複雑な影響を与えたように思われる。歴史的にみると、日本における西洋思想の導入は英仏の政治社会思想から始まり、やがてドイツ観念論が主流となった。それは同時に、狭義の意味での文学と哲学の分離を促進していく。その過程で、フランス思想——デカルトなど一部の例外を除く、特にそのコンテポラルな部分——は哲学〔研究〕者にあまり顧みられないようになり、もっぱら文学〔研究〕者や市井の文芸批評家が紹介の役割を担うこととなったのである¹⁾。その是非についてここで論評することはできない。ただ、当時の日本が、サルトルの仕事を総体として取り扱いにくい知的環境にあったことだけは間違いないだろう。少なくとも戦後しばらくの時期まで窺われる、日本へのサルトル導入に付きまとうある座りの悪さ、アンバランスな感じ、その理由の一端には、受容する側の〔フランスにはみられない〕こうした特殊な事情を勘案してもよいのではないか。

日本におけるサルトルの受容がいびつな構造を伴うことの要因はいま一つある。それは1940年から1949年まで、日本へのフランス書の輸入が途絶えていたという歴史的事実である²⁾。この事実は、サルトルの最初の著作である『想像力』が1936年、『嘔吐』が1938年、『存在と無』が1943年の公刊であることに鑑みると、戦前戦中の日本においては、ごく一部の人たちを除き、サルトルがその名前さえ知られていない存在であったことを容易に推測させる。にもかかわらず、戦後まもない頃から、一方では仏文学〔研究〕者の努力と英米メディアを通じたヨーロッパ情報の流布により、他方では言論統制からの解放を契機とした諸々の自由と敗戦による茫漠たる知的雰囲気の中で、私たちはサルトルの「エクジスタンシアリズム」に熱狂的に飛びつき、これを貪欲に摂取していた。いったいどういうことだろうか。ひょっとすると、当時の私たちはオリジナルに触れないまま、サルトルを知ったつもりになり、サルトルについて語っていたのかもしれない。

以下では、いま概観した背景を顧慮しつつ、日本におけるサルトルの受容の変遷を大まかに辿り、それを通じて、そこにみられる特徴を探っていくこととする。とはいえ、日本におけるサルトルの受容の全貌を今日に到るまで限なく照射するにはあまりに巨大な作業が必要である。論者には到底その準備も資格もない。したがって本稿では、考察の対象とする期間を戦前から1950～55年頃までに限定させていただく。この線引きを採用したことにはそれなりの理由がある。先にも記したように、フランス書の輸入が解禁されてサルトルに対する正確なアプローチが——もちろん知識や経済上の制限もあるが、原理的には——誰にも等しく可能になるのがようやく1950年に入ってからであり、またサルトルの既刊書の主要な翻訳がほぼ出揃うのが1955年前後であるというのがそれである。言い換えれば、私たちは、

この微妙な期間の導入傾向を整理比較することで、サルトルの思想研究のあり方だけでなく、そこに優れて日本的な受容の特徴を垣間見ることができるかもしれないと考えている。

1. 戦前戦中期のサルトル導入

資料³⁾によれば、サルトルは早くもエコール・ノルマルに入学する1924年前後から文筆活動を始めていたらしい。だが、彼の仕事が公に認知されるのは、学生時代からのテーマであった「想像力」に関する論文を刊行した1936年春のことである。この論文が日本で取り上げられたのは意外に早い。その翌年、『思想』6月号に掲載された三木清の論文「神話(中)」——のちに『構想力の論理 第一』の一部となる——の末尾に次のようなくだりを見つけることができる。

「また固よりイマージュは物の寫しであるのではない。イマージュを物の寫しとなし、それ自身物と同様に存在するかのやうに考へる素樸な形而上學乃至存在論が構想力の本質の理解を妨げて來た、とサルトルも云つてゐる。物とそのイマージュとを比較すれば、そこに本質の同一 l'identité d'essence が、即ちイデア的同一が認められるであらう。併しそのことから存在の同一が従つて來ない。物としての存在と形像としての存在とは存在の様式 le mode d'existence を異にする。「すべての存在の様式を物理的存在の様式の型に従つて構成するといふ我々の殆ど打克ち難い習慣を何よりも拂ひ退けねばならぬ」、とサルトルは書いてゐる。」⁴⁾

おそらくこれが日本におけるサルトルへの初めての言及である。とはいえ、三木が他の箇所でもサルトルを参照した形跡はみられない。彼はサルトルに惹かれたというよりも、「ロゴスとパトスとの綜合」を形式ならぬ「形の論理」としての「構想力の論理」に見出そうとする自らの試みを「先づ現象學的な形において」行う補助線の一つとしてサルトルを引いたに過ぎないのだろう⁵⁾。そのような取り扱いに甘んじるものの、日本へのサルトルの導入が現象学という観点から始められたのは特筆すべき事実である。もちろん『想像力』という著作自体、イマージュ (Bild, image) という語の解釈をめぐる哲学史を丹念に辿り直した上で、現象学的方法の革新性を論証するのが目的だったのだから、三木の位置付けは正当なものと言える。にもかかわらず、サルトルのこの著作は日本の現象学〔研究〕者の関心を集めるまでに至らなかった。

1937年に Recherches Philosophiques〔哲学研究〕で発表された『自我の超越』では、フッサールの方法に基づくフッサール批判とでも形容すべき議論が展開されていたが、日本ではこれに対しても黙殺と言うほかない状態が続く。当時の日本における主要な哲学雑誌に掲載

された現象学関係の論文を繰ってみると、ブレンターノ、ハイデガー、シェーラーへの言及ばかりで、サルトルへの言及を見出すことはできない。それどころか、他のジャンル——こう表現してよいのであればだが——も含めて、サルトルを参照した論文は皆無である。論者の知り得た限り、かろうじて1942年に「心理學關係では、サルトル *Jeann Paul Sartre* と言ふ人が夢の研究を發表してゐる」⁶⁾と串田孫一が触れているに過ぎない。

文学作品に目を転じてみよう。サルトルの『壁』は *La Nouvelle Revue Française* [新フランス評論] 1937年7月号に掲載された。その最初の翻訳⁷⁾が日本に現れたのは翌年1月のことで、この反応もかなり早い。驚くべきことに、それは『嘔吐』がゴンクール賞の候補作となり、サルトルが世間の注目を浴びる以前の時期に当たる。その後も、同人誌を含むいくつかの雑誌において、フランスでの発表からほとんど間を置くことなく、『嘔吐』の抜粋訳をまとめた紹介や部分訳が試みられたり、『部屋』が翻訳されたりといった状況が続く。時局の制約がなければ、その動きはさらに加速していったことだろう。

それに比べると、哲学論文については、翻訳や概説による紹介といった側面においても反応は鈍いままである。1940年2月の公刊である『想像力の問題 (*L'imaginaire*)』は措くとしても、『壁』や『嘔吐』とほぼ同時期に発表されていた『自我の超越』や『情緒論粗描』といった小論でさえ、そのような兆候はみられない。『想像力』に関しても事態は同様である。こうした事実は、戦前戦中の日本において、哲学者サルトルは小説家サルトルほどに耳目を集めていなかったことを推察させる。

とはいえ、受容の実質は紹介の有無に還元されるものではない。重要なのはむしろ、受容された当のものがいかに論じられ、解釈され、どのように昇華されたかということであり、受容という行為も厳密にはそうした審級において評価されるべきである。そしてその観点からすれば、文学においても哲学の場合とさしたる違いはなかったように思われる。なぜなら、サルトルの小説に研究と呼ぶべき水準で取り組んだ論文はほとんど見当たらないからである〔その一因として、サルトルにおける小説と哲学の思想的不可分性、すなわち現象学という方法的背景を、文学〔研究〕者が捉えあぐねていた可能性が考えられるかもしれない〕。

残念ながら、戦前戦中におけるサルトルの受容は、全体として揺籃の域を出ていなかったと評価せざるを得ないだろう。調査し得た資料をみる限り、程度の差はあれ、そこに精緻な研究がなされた痕跡を見出すのは困難である。だからといって、私たちは先達の努力を軽視するつもりもなければ、非難したいわけでもない。当時、サルトルの仕事を厳密に研究するにはあまりに材料が乏しかったのは事実だし、また日本のアカデミズムと世界の特殊な状況という二重の制約もあった。それらの問題が解消されるには、もうしばらくの時間が必要だったのである。

2. 戦後期におけるサルトルの流行

ところで、そうした事情は何も日本におけるばかりではなかった。スターンによれば、フランスにおいてさえ「第二次大戦の前夜まではサルトルの評判はラテン区とモンパルナスとに限られ、地方的評判以上には殆ど出なかった」⁸⁾らしい。篠沢秀夫も『嘔吐』について「第二次大戦開戦に先立つこと一年、一九三八年のゴンクール賞候補となったこの作品が、フランスで、そして日本で注目を浴びたのは、戦争中に劇作〔『蠅』と『出口なし』を指す：論者〕の成功と哲学論文〔『存在と無』を指す：論者〕の評判の両輪で名を高め、解放〔1944年8月：論者〕直後のパリで風俗としての「実存主義」の大流行が見られてからである」⁹⁾と回想している。戦中からなのか、それとも戦後からなのかという相違はあるものの、フランスにおいても日本においても事情は似たようなものだったのだ。

いわゆる実存主義が流行し始めたのは1945年秋からである。具体的には、同年9月に『自由への道』の最初の二巻が刊行され、10月15日にはLes Temps Modernes〔現代〕が創刊、さらに二週間後の10月29日にはクラブ・マントナンで〈実存主義はヒューマンイズムか〉と題する講演が行われて大きな反響を呼ぶなどの出来事が相次いで起った。伊吹武彦によれば、その様子が日本に伝わってきたのは、約一年後のことらしい¹⁰⁾。とはいっても、その波瀾が直接日本に押し寄せたわけではない。やや長くなるが、その間の事情を告げる白井浩司の発言に耳を傾けておこう。「やぶにらみで小男の、難解な哲学書『存在と無』の著者であるサルトルという作家が、雑誌「現代」を創刊し、実存主義という思想を提唱してパリジャンの注目を集めている、という記事が「タイム」誌に載ったのである。かくて京都では、伊吹武彦教授の翻訳で「水入らず」と「壁」が上梓され、『嘔吐』も、片山修三が創立した青磁社という出版社から刊行された。」¹¹⁾してみれば、サルトルの流行はアメリカを経由するかたちで日本に伝えられたことになる。どういうことなのか。

連合国の統制下にあった戦後の日本では、戦前戦中に引き続き、フランス書の輸入は禁止されていた。したがって、海外からの情報のほとんどは占領軍の中心であるアメリカからもたらされるものに頼るほかない。タイミングよくと言うべきか、サルトルは1945年1月から5月にかけてLe Figaro〔フィガロ〕、Combat〔コンバ〕両紙の特派員として、さらに大学での講演のために同年12月から翌年の4月にかけてアメリカを訪問していた。そのおかげで彼はアメリカでの認知度も高く、かなり早い段階で英訳もいくつか刊行されたらしい。私たちは、そのようなアメリカを介して、サルトルと〔再び〕顔を合わせるようになったわけである。実際、当時の日本でサルトルを論じた雑誌論文や単行本の中には、仏文学〔研究〕者による邦語での紹介と並び、ジャーナリストの報告や英訳などを通じてサルトルの著作に接した旨を明示しつつ議論を展開したものも少なくない¹²⁾。ここでは、そうした制約があっ

たことを念頭に置いた上で、戦後のサルトル受容の特徴を整理していこう。

矢内原伊作は『実存主義の文学』の中で「第二次大戦後、伊吹武彦氏その他によってわが国に紹介されたサルトルの文学、またサルトルの思想を中心とする実存主義の文学は、文壇及び読書界に強い関心をもって迎えられ、流行的な現象をすら呈した。それは始め『水いらず』等に於ける露骨な描写を通じて、田村泰次郎氏の『肉体の門』と同じような読まれ方で読まれたらしい¹³⁾と述べている。導入の当初、サルトルを「肉體文學」の一種とみなす風潮にはかなり執拗なものがあつたようで、そうした予断を矯正してサルトルの実質を救い出すことが当時の文学〔研究〕者にとって喫緊の課題であつたことが伺われる¹⁴⁾。この風潮に抗してまっさきに試みられたのが、「肉体」ではなく「実存」にサルトルの思想的モチーフをみようとする読解である。これには、『壁』、『水いらず』、『嘔吐』といった翻訳が公刊されたばかりの小説から、戦中に上演された戯曲である『蠅』、『出口なし』を挟み、サルトルを実存主義者たらしめる契機となつた『自由への道』第一部と第二部〔『分別ざかり』と『猶予』〕および『実存主義とは何か』までを一本の線で結びつけるという態度が多くみられる¹⁵⁾。こうした読解の呈示は「文壇及び読書界」に蔓延する浅薄なサルトル理解に警鐘を鳴らし、彼らおよびその読者を啓蒙する意味ではたしかに効率的な手段であつたと言える。フランス書の入手が困難であつた当時、実存主義が一世を風靡する素材となつた作品の紹介を急ぐとともに、既存の翻訳を駆使して両者の思想的な繋がりを論証するのは、稀少な情報源を持つ者が当然なすべき仕事であつた。

とはいうものの、議論が「実存 (existence)」¹⁶⁾をキーワードとして展開される場合には、周到な準備が必要である。そのためには、何よりもまずサルトルにおける「実存」の含意を精査しておかねばならない〔例えば、『嘔吐』の「実存」と『自由への道』の「実存」を同一視してよいのか否か〕。やや遅れて、こうした隘路を避け、あるいは引き受けた上で、よりマクロな視点に立ってサルトルの位置を確定しようとする動きが出てきた。それは、実存主義をサンボリズム、レアリスム、ロマン主義、シュールレアリスムに続く文学運動の一つと捉える見方である¹⁷⁾。ある意味でこの手続きは正統的と言える。だが、裏を返せば、これは実存主義を文学史に回収する試みにほかならない。そこから零落するものは必然的にあるだろう。

戦後のサルトル受容にはもう一つの特徴がある。それは、サルトル自身が『存在と無』や『実存主義とは何か』で提示した議論の枠組みに準拠し、彼の思想をもっぱら哲学史の流れにおいて解釈しようとする傾向である。一般に、『存在と無』を重視するものには現象学運動の一環として、『実存主義とは何か』に依拠するものには実存思想という文脈から、サルトルを読解するケースが多い。後者の場合、さらに「実存哲学」と「実存主義」を区別するかどうかによって細分することもできる¹⁸⁾——もっとも、大勢を占めるのは、それらの様相が比率を異にしつつもミックスされて現れるという事例であるが。なお、こうした傾向を

有する受容には、戦前の文学における受容と同じように、サルトルの思想の要約や祖述に徹したものが多くみられる点も縷言しておく¹⁹⁾。

それ以外では、サルトルの政治的主張や文芸批評家としての側面に刮目して議論を展開するものもみられる。しかし、そうした動きが活発になってくるのはもう少し時期が下ってからなので、本稿では主題として取り上げない。

では、こうした傾向を踏まえた上で、その中でも比較的バランスのとれた、当時を代表する研究のいくつかを具体的にみていくことにしよう。検討するのは、森有正『現代フランス思想の展望』(1950年)、竹内芳郎『サルトル哲学入門』(1956年)、平井啓之『ランボオからサルトルへ』(1958年)の三つである。

a) エゴのプロブレマティック

森有正(1911-1976)はパスカル研究を専門としたが、それに限らずフランス思想全般を幅広く研究した人である。『現代フランス思想の展望』は1950年1月に桜井書店から出版された。表題から予想される通り、同書は当時のフランス思想の動向をめぐって書かれた複数の論文——その大半は1948年から1949年にかけて各種雑誌で発表されたもの——を収録したものである。つまり、サルトルの研究書とすることを念頭にまとめられた著作ではない。にもかかわらず本書を取り上げるのは、①議論の大半がサルトルに定位しているからであり、②アンソロジーを除けば、実存主義に関する日本で最初の単著の一つとして、後世の研究に少なからぬ影響を与えたからであり、③単なる要約や紹介の域にとどまらない、真に研究の水準に達した最初の本格的なサルトル論の一つとみなし得るからである。

森はサルトルを「単なる思想家ではなく、著名な小説家、劇作家であり、またレジスタンスに活躍し、更に戦後マルクス主義と実存主義との限界線の上に立つ、優れた識見を有する実践者」²⁰⁾とみなす。だが、すぐに続けて「しかしかれは元来思想家であり、思想家として発足し、その芸術的、実践的活動に不断の思想的吟味を加えることを怠らぬ思想家である」²¹⁾と付言している。このような森の視線は、まず『自我の超越』に注がれる。というのも、森にとって『自我の超越』は、フッサールを援用してデカルト的な近代の自我観念から脱却し、非人称的意識の地平の上に新たな実存的自我を展開する地盤を確保せんとする限りで、サルトルにおいて現象学と実存主義を橋渡しする重要な位置を占める論文とみなされ得るからである²²⁾。森によれば、『存在と無』のサルトルが他者の問題と格闘することになるのも、現象学的に純化された意識に自我を成立せしめるのが実践という境位であったからにほかならない。

主に『存在と無』第三部を参照しつつ²³⁾、森は、サルトルによる意識の構造分析が主体の孤独化に帰結しながらも、まさしくそこに実存主義の主張する自由が萌すと述べる。純粹意識の現実は「同時に、根源的な、自由な、決断においてそこに在るのである。しかもこの現

実は同時に価値的であって、そこに人間の個々の実践の場が開示され、人は、自己の意志を、この意識の場における価値的關係に従って決定する時に、正しい決定を下したのであり、そこに自由が成立する。²⁴⁾サルトルはさらにここから、社会変革の実践の問題へと向った。『唯物論と革命』がその成果である。しかし、森によれば、サルトル自身も危惧していたように、同書では「いかにしてかれの実存主義から〔社会変革の：論者〕実践が出てくるか明らかではない。」²⁵⁾それはなぜか。森は、現象学的方法によって近代的自我を換骨奪胎した実存主義におお「個我意識の執拗な残滓」²⁶⁾がみられることにその原因をみる。森の眼には、無神論的実存主義を標榜するサルトルの思想は「真の普遍性との交わりをもたらずものではない」²⁷⁾いがゆえに、最終的には「個我の立場に転落せざるをえない」²⁸⁾と映るのである。かくしてサルトル、そして実存主義の限界が告げられる。ただし、この見解の背後には、控え目ながらも、パスカルに象徴されるキリスト教的信仰の世界観に立脚する森自身の思想が透けてみえることを忘れてはならない。

このように、森は「思想家」としてのサルトルという視点に基づき、『自我の超越』、『存在と無』、『唯物論と革命』を一直線上に並べて議論を展開する。そのねらいは、サルトル読解の切り口を自我論に看取し、それがどのように自由論と接合されるのかを分析することにある。それはたしかに、サルトルにおいて現象学と実存主義がどのように結びつくのかを方法的に解明することに繋がるだろう。森の功績は、何よりもサルトルにおける『自我の超越』の思想的位置付けを画定した点に求められる。それは後年のサルトル研究に一つのモデルを提供したと言ってよい〔『自我の超越』を翻訳した竹内芳郎も、訳出に際して森の仕事を参照したと告白している〕。その一方で、『存在と無』や『唯物論と革命』については、もっぱら海外の先行研究や国内での紹介を手引きにしており、『自我の超越』読解の見事さに比べるとやや物足りなさを感じなくもない。そうした留保はあるものの、早くも1950年の時点で、独自の視角に基いて海外の研究〔当時〕に伍し得る水準を持った研究を世に問うた意義は大きく、尊敬に値する仕事と言える。

b) 他者の人間学

竹内芳郎(1924-)はサルトル研究から出発した哲学者である。ここで取り上げる『サルトル哲学入門』以外にも、『実存的自由の冒険』や『サルトルとマルクス主義』など、サルトルに関する数多くの著作を世に送り出している²⁹⁾。また、人文書院から刊行されたサルトル全集の『自我の超越』と『情緒論粗描』〔『想像力』と併せて第23巻『哲学論文集』に収録されている〕を翻訳したり、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』や『シーニュ』の翻訳に携わったりもしている。

『サルトル哲学入門』は1956年7月に河出書房から河出文庫の1冊として上梓された大部の著作である。竹内自身の言葉を借りれば「本書は、『存在と虚無』を中心にして、『情緒論

粗描』・『想像力』・『想像上のもの』など他の哲学書および各種の評論・文学作品を参照しつつ、現在にいたるまでのサルトルの哲学を全面的にあきらかにしようとして書かれたものである。³⁰⁾つまり、竹内はサルトルの思想を総体として解明することを企図しているわけだ。だが、彼の目論見はそれだけにとどまらない。サルトルが『存在と無』の末尾で予告した倫理に関する著作を發表していない当時の状況³¹⁾に鑑み、竹内は「各書の評論・文学作品および彼の弟子たちの著作を参考にしつつ」³²⁾サルトルの実存的倫理の展望を試みさえしている。本書は若きサルトリアンの野心に満ちた著作なのである。

竹内によれば、サルトルにおいては「フッサールやハイデッガーの哲学的方法が、彼らの静かな書齋のなかからひきずり出されて、血の汗を噴く裸形の人間の姿を写すために使用され³³⁾ている。したがって「サルトル哲学の理解の唯一の道は、まず私たち自身が具体的な生活の場で実感し実践すること以外にあり得ない」³⁴⁾。これが竹内におけるサルトル解釈の基本的なスタンスである。このスタンスに従い、彼のまなざしはまず、サルトルがいかにして現象学を存在論に昇華させたかという点に向けられる。竹内によれば、サルトルは超越論的意識において自らをあらわす超越的存在者の存在を「即自存在」、超越論的意識を「対自存在」と呼んでいる。「この二つの存在の存在連関を、超越論的・存在論的意識——これを実存 (Existenz; existence) とする——の地平で徹底的に究明してゆくこと」³⁵⁾が現象学的存在論〔『存在と無』〕の課題である。それは「前存在論的な存在会得を顕在化」³⁶⁾させ、そうすることで「人間存在をその存在において見透し得るよう」³⁷⁾しなければならない。してみれば、竹内の読解はサルトルの思想を人間学として開示することをめざすわけである。このような読解が、あたかもそのネガのように、同じ現象学から出発しながらも人間学の構築に向わなかったハイデッガーの批判に至るのは必定である。竹内はハイデッガーを観念論、独我論と呼んで繰り返し退け³⁸⁾、そのアンチ・ヒューマニズムに異議を唱えることで、サルトルの人間学、特に他者論の「画期的功績」を際立たせる。竹内によれば、ハイデッガーと異なり、サルトルの真価は「他者の問題に関する従来の哲学の曖昧な態度を一擲して、この問題を己れの哲学の中心部において真向から取扱ったということ」³⁹⁾にあるのだ。

竹内の議論は『存在と無』を中心に据え、それ以前の哲学論文と『嘔吐』を援用することで同書の理論的背景を構成し、さらに同書第四部で展開される「実存的⁴⁰⁾精神分析」を『自由への道』と『文学とは何か』に接続することで独自の倫理的展望を行うという体裁をとっている。その趣旨は徹底して実存的な〈自己—他者〉問題の解明にあるだろう。語り口も極めて明晰で、門外漢にもサルトルの主張が理解しやすいように工夫して書かれている。ただ、過剰なほどサルトルに寄り添うあまり、やや外れた角度からハイデッガーを批判したり、あるいは逆に、その寄り添いにもかかわらず、ヘーゲルへの言及がほとんどないといった点については⁴⁰⁾、いささか疑問が残らなくもない。さらに言えば、フロイトに対する限定的評価も、サルトルの議論の枠組みを出るものではないだろう〔論者としては、本書がレヴィナスの現

象学理解や他者論と交錯していればより興味深い著作になったと思うが、当時の知的状況からすると無理な相談かもしれない。そうした不満はあるものの、サルトルの既刊書を網羅的に参照して包括的なサルトル論を展開した研究は、日本においては竹内のものを嚆矢とする。この事実を忘れてはならない。後代の研究者にとっても、肯定的であれ否定的であれ、本書への目配りは欠かせないはずである。その意味で、本書は今後とも読み継がれるべき基礎研究という位置を占めていくように思われる。

c) 象徴主義と実存主義

平井啓之（1921-1992）は、フランス象徴詩の研究で知られる鈴木信太郎とラブレーの研究で知られる渡辺一夫の薫陶を受けた仏文学〔研究〕者である。1958年6月、それまでに書き溜められた論文をもとにして弘文堂より公刊された『ランボオからサルトルへ——フランス象徴主義の問題——』には森有正への献辞がみえることから、森との親交も深かったことが忍ばれる。平井は、サルトルについて数多くの論文を執筆しただけでなく、『想像力』、『想像力の問題』といった哲学論文の翻訳にも従事しており、日本のサルトル受容に大きく貢献した人のひとりと言える。

先の二人と異なり、平井は、ボードレーン以降のヴァレリー、クロード、ジイド、プルーストといった、いわゆる象徴主義文学の系譜上にサルトルを位置付ける。「サルトルはもとより象徴主義の作家ではないが、彼が説く実存主義のはらむ諸問題が多く、その点で象徴主義のそれと本質的なかわり合いをもつ」⁴¹⁾というのがその理由である。けれども、周知のように、サルトルは象徴主義に極めて批判的な態度をとっていた。それゆえ、平井の企図はややアクロバティックな様相を呈することになる。

平井はまず「サルトルが自我の絶対性を否定する論証の際に、妻々ランボオのこの言葉、「吾れは他者なり」を引き合いに出していること」⁴²⁾に実存主義と象徴主義の接点を見出し、さらにこのランボオの言葉はマルルメの『骰子一擲』に遡行できると述べる。平井によれば、このように自己を他者と捉え、あるいは世界へ投げ出されたものと捉える見方は「生哲学的な象徴主義の問題が実存主義とかわりをもつことを暗示する」⁴³⁾のである。さらに平井は、『嘔吐』のロカタンヤアニーと、プルーストの『失われた時を求めて』のマルセルには性格や状況に多くの類似がみられるのだから、サルトルのプルースト批判は「見当はずれ」⁴⁴⁾であり、「相互の明らかな血縁関係にもかかわらず、奇妙に誤解の多いものである」⁴⁵⁾とまで言い切っている。平井が自らの主張の論拠として挙げるのは、想像力に関するサルトルの哲学論文である。平井によれば、そもそもサルトルが想像力の研究から出発したのは、当時の文学精神〔象徴主義〕が抱えていた問題、すなわち〈想像力による非現実世界の創造〉に彼もまた思考を働かせていたからにほかならない。実際、『想像界』〔『想像力の問題』を指す〕の末尾の芸術論には、象徴主義と同じく、芸術美は非存在、非現実界に成立する価値で

あると書かれているのではないか。この意味で、サルトルは象徴主義の主張に存在論的な基礎付けを与えたとみるべきなのである。かくして平井は「カミュやサルトル一派の、所謂無神論的実存主義を標榜する連中は、象徴主義的文学風土の審美主義を否定しながらも、《神の不在に於ける人間的尊厳の確証への希い》という点で、象徴主義の最も根源的な問題にふれ合う」⁴⁶⁾と結論するに至る。

平井の読解の卓抜さは、狭義の意味での哲学と文学の障壁を取り去って縦横無尽に展開される議論のしなやかさに求められるだろう。とりわけ、サルトルにおける審美性と倫理性の二律背反に注目し、そこに『想像界』と『嘔吐』が結びつくポイントを見定める手続きは鮮やかである⁴⁷⁾。また、この二律背反という着想に基づき、存在論である『存在と無』が取り扱わなかった倫理の次元を『聖ジュネ』の「実存主義的精神分析」にみる視点も、斬新な読解を提供するものとみなし得る。ただ、こうした作業の裏返しとして、平井の議論が総じて論証に乏しいという難点を抱えていることは否めない。特に、印象上の類似を思想上の類似とほぼ無媒介に一致させるやり方は、感覚としては納得できても、論理としては説得力に欠けるのではないか。とはいえ、実存主義を、単に文学史上に継起する変革運動の一環として捉えるのではなく、そこに優れて二十世紀全体に——あるいは、現代においてもなお——通底する思想的困難に対する格闘および応答の一例をみようとする限りで、平井の研究には同時代の他の追随を許さない先駆性があった。本書の価値がこれからも色褪せることのない所以である。

暫定的な概括

以上の研究から何がでてくるだろうか。三人に共通して伺われるのは、サルトル自身の発言に則しているとはいえ、先行する思想動向との関係を厳密に押えた上で、サルトルの可能性を洞察しようとする態度である。彼らは現象学や象徴主義に焦点を当てて論じているが、そうしたアプローチは、当時の各種雑誌を賑わせていた〈行動する知識人〉というサルトルのイメージ⁴⁸⁾から意外なほど隔たっている。言い換えれば、現象としてのサルトルと思想としてのサルトルはいくらか次元を異にして受容されていたのである。

この乖離はいわゆるサルトル・カミュ論争（1951-1952年、日本での紹介は1953年）、そしてサルトル・ルフォール論争（1953-1954年、日本での紹介は1955年）を契機として急速に狭まっていく。あたかもサルトルのアクチュアルな活動と連携するかのよう、日本でも、哲学的には現象学よりも実存哲学やマルクス主義との異同を解明しようとする機運が高まり、文学的には小説よりも戯曲や文学論〔文芸批評〕への関心が強まるのである。戦後に執筆されたサルトルの作品が相次いで翻訳されたことも、そうした動きを後押ししただろう。もちろん、その背景には、情報伝達の自由化に伴い、サルトルの著作が入手しやすくなったとい

う事実だけでなく、政治や社会に対する彼の「アンガージュマン (engagement)」が従前にも増してつぶさに報告されるようになるという状況もあったことを忘れてはならない⁴⁹⁾。いづれにせよ、サルトルに関する様々な情報が蓄積されていくにつれ、狭義の哲学や文学という垣根を越えた包括的なサルトル研究を生み出す土壌も少しずつ形成されていったのである。それはやがて、サルトルの全貌を「実存主義」というカテゴリーの下で論じる試みを可能にするだろう⁵⁰⁾。こうして日本におけるサルトル研究のアカデミックな基盤は確立したのだと考えられる。

だが、折しもその頃、思想としての実存主義はフランスにおいてまさに終焉を迎えようとしていた。いわゆる構造主義の勃興である⁵¹⁾。皮肉なことに——あるいは通常そうであるのかもしれないが——思想としての終りと研究の始まりとが重なったのだ。そうすると、サルトルの同時代的な言説は表層的な部分ばかりが伝えられがちになる。このようなサルトルに定位して研究を進めると、どういう帰結が待っているだろうか。遠からず訪れるアクチュアリティの風化や失効——とりわけマルクス主義の退潮の影響は大きい——に伴う、サルトルの思想そのものの忘却である。この忘却は、日本におけるサルトルの受容の黎明期にみられた、必ずしも実存主義に還元され得ないサルトルの可能性まで道連れにしてしまったように思われる。そうした試練を経た後で、サルトル研究はどのように〔再〕活性化されていくのか。その道筋をさらに辿るのが、私たちに残された課題である。

注

- 1) むろん私たちは西田幾多郎、九鬼周造、三木清に代表されるフランス思想の研究成果を知らないわけではない。だが、戦前戦中のいわゆる官学アカデミズムがその形成の経緯からしてドイツ哲学偏重の状況にあったのは、今日では否定し難い事実としてほぼ定着した見解であると言ってよいだろう。フランス思想の導入に積極的かつ影響力を持っていたのは、ひょっとすると小林秀雄や林達夫といった批評家のほうかもしれない。なお、九鬼にはサルトルとの邂逅をめぐる興味深い逸話があるが、現行の岩波書店版の全集の中には、それに該当する記述を見出すことができなかった。
- 2) 佐藤朔『二十世紀のフランス文學』、北隆館、1950年、1頁、あるいは佐藤朔「サルトルについて」、『いま、サルトル——サルトル再入門』所収、思潮社、1991年、22-25頁などを参照されたい。
- 3) Michel CONTAT et Michel RYBALKA, *Les Ecrits de Sartre: chronologie, bibliographie commentée*, Paris, Gallimard, 1970, p. 23.
- 4) 三木清「神話(中)」、『思想』昭和12年6月號、岩波書店、70-71頁。ただし、三木はサルトルの引用箇所を具体的には明示していないので、参考までに付記しておく。Jean-Paul SARTRE, *L'Imagination*, Paris, PUF/Quadrige, 1994, p. 3. [ただし、単行本として上梓された際、三木は字句等にいくらか修正を施している。いわば決定稿であるこの改訂版も参考までに転写しておく。「イマージュは物の寫しであるのではない。イマージュを物の寫しとなし、それ自身物と同様に存在するかの如く考へる素樸な形而上學乃至存在論が構想力の本質の理解を妨げてき

- た、とサルトルも云つてゐる。物とそのイメージとを比較すれば、そこに本質の同一 l'identité d'essence が、即ちイデア的同一が認められるであらう。しかしそのことから存在の同一は従つて来ない。物としての存在と形像としての存在とは存在の様式 le mode d'existence を異にする。すべての存在の様式を物理的存在の様式の型に従つて構成するといふ我々の殆ど打克ち難い習慣を何よりも拂ひ退けねばならぬ、とサルトルは書いてゐる。」三木清「構想力の論理」、『三木清全集』第八卷所収、岩波書店、1967年、62-63頁。]
- 5) 三木は『構想力の論理 第一』に付した序で「私はカントが構想力に悟性と感性とを結合する機能を認めたことを想起しながら、構想力の論理に思ひ至つたのである」と述べている。実際、彼の死後に公刊された『構想力の論理 第二』〔一冊にまとめられた全集版では後半に相当する〕を読むと、そのほとんどがカントとの格闘に費やされていることがわかる。なお、蛇足ながら、「構想力」と「想像力」には原語上の区別がなく、ドイツ語では Einbildungskraft、フランス語では imagination という同じ語が用いられることを付記しておく。
 - 6) 串田孫一「現代佛蘭西哲學管窺」、『理想』昭和17年3月號、理想社、71頁。引用は原文のまま。
 - 7) 論者の知る限り、『壁』の翻訳は三つ存在する。石川湧訳（『自由』昭和13年1月號）、堀口大學訳（『中央公論』昭和15年1月號）、伊吹武彦訳（『時論』昭和21年6月號、7月號）である。
 - 8) アルフレッド・スターン『サルトル論——その哲学と実存的精神分析』、筑摩書房、1956年、亀井裕訳、9頁。
 - 9) 篠沢秀夫「死せるサルトルは誰を走らせるか」、前掲『いま、サルトル——サルトル再入門』所収、120頁。
 - 10) 伊吹武彦『サルトル論』、世界文学社、1949年、195頁。
 - 11) 白井浩司「『嘔吐』との関係」、前掲『いま、サルトル——サルトル再入門』所収、29頁。因みに、伊吹訳『水いらず・壁』は1946年12月に、白井浩司訳『嘔吐』は1947年2月にそれぞれ公刊されている。
 - 12) 例えば、高坂正顕『キェルケゴオルからサルトルへ——実存哲學研究——』、弘文堂、1949年、藤野涉『サルトルと唯物論』、三一書房、1950年など。
 - 13) 矢内原伊作『実存主義の文學』、河出書房（河出新書71）、1955年、83頁。
 - 14) これについては、小松清「サルトルにおけるエロチシズム——「水いらず」について——」、『実存主義者サルトルをめぐつて』所収、草美社、1948年、112-113頁、エドゥアール・テッセ「J・P・サルトルについて」、A.C.F.編『J・P・サルトル』所収、新樹社、1948年、46頁なども参照されたい。
 - 15) 代表的なものとして、白井浩司「サルトルの作品を中心に」、前掲『実存主義者サルトルをめぐつて』所収、136-168頁、および白井浩司「『嘔吐』と『自由への道』」、前掲『J・P・サルトル』所収、117-186頁を挙げておく。いずれも、サルトルにおける現象学的契機への目配りが希薄な点に留意されたい。
 - 16) 「実存」という訳語を考案したのは九鬼周造であるとされる。「可能的存在に對して現實的存在を實存と云つてもよい。」（九鬼周造「実存の哲學」、岩波講座哲學〔現代の哲學〕第十五回配本 六、岩波書店、昭和八年、二四頁）ただし、この訳語はサルトルを想定したものではなく、ハイデガーを契機とした西洋哲学の全体を貫く存在解釈の歴史を念頭に置いたものであることを付記しておく。

- 17) 例えば、佐藤朔『知性の文學』、河出書房〔河出新書〕、1956年など。
- 18) 概して、「実存哲学」と「実存主義」を区別する論者は、その論拠をハイデガー『ヒューマニズム書簡』やヤスパース『哲学1』に求め、両者に連続的發展を見出す論者は、サルトル『実存主義とは何か』に立脚する傾向がある。だが、両者を区別するかしないかというのは、実は本質的な問題ではないかもしれない。問題とすべきはむしろ、どちらの立場にも共通してみられる、ハイデガー『存在と時間』にみられる現存在分析、およびそこで辿られる思想史的系譜に対する暗黙の承認のほうである。サルトルの日本への導入については、それ以前の日本における実存哲学の受容、とりわけハイデガーのそれが大きな影響を及ぼしているように思われる。
- なお、昭和30年に創刊された雑誌『実存』（理想社）は当初、ヤスパース、ハイデガー、キルケゴールの特集を組んでいたが、二年後に『実存主義』と改名するとともに、サルトルへの傾斜を強めている。その逆に（?）、学会組織である「実存主義協会」は、「実存思想協会」と改名することで実存哲学や実存主義以外の思想への接近も容易な形態を確保し、今日に至るまで積極的な活動を続けている。
- 19) 松浪信三郎『實存哲學素描』、小石川書房、1948年〔のちに加筆した上で『実存哲学』と改題し、河出書房から再刊〕、金子武蔵『サルトルの哲學——存在と虚無——』、弘文堂〔アテネ新書〕、1954年などがある。
- 20) 森有正「現代フランス思想の展望」、『森有正全集』第六卷所収、筑摩書房、1979年、81頁〔今日では原本が参照困難である事情に鑑み、読者による確認の煩瑣を軽減するため、引用は全集版の頁数を掲げる〕。
- 21) 同上。
- 22) 同、93頁を参照されたい。
- 23) 同、53頁以下を参照されたい。
- 24) 同、174頁。
- 25) 同、47頁。
- 26) 同、50頁。
- 27) 同、6頁。
- 28) 同上。
- 29) 『実存的自由の冒険』は1963年、『サルトルとマルクス主義』は1964年の公刊であるため、本稿では取り上げない。
- 30) 竹内芳郎『サルトル哲学序説』、筑摩書房、1972年、373頁〔今日では原本が参照困難である事情に鑑み、読者による確認の煩瑣を軽減するため、引用は表題を改めた筑摩叢書版の頁数を掲げる〕。
- 31) 結局この予告はサルトルの生前には実現しなかったが、私たちは今日、彼の死後に公刊された『倫理学ノート』や『真理と実存』にその一端を窺うことができる。
- 32) 同、277頁。
- 33) 同、334頁。
- 34) 同、332頁。
- 35) 同、41頁。強調は著者による。
- 36) 同、44頁。強調は著者による。
- 37) 同上。強調は著者による。
- 38) 同、46, 51, 59, 129-130, 187頁などを参照されたい。

- 39) 同、187 頁。
- 40) サルトルに影響を与えたとされるコジェーヴのヘーゲル講義の記録がクノーによる編纂を経てフランスで出版されたのは 1947 年のことである。これは竹内の『サルトル哲学入門』に先立つ。もっとも、『存在と無』を読む限り、サルトルのヘーゲル解釈は、フッサール解釈やハイデガー解釈に比べると極めて穏当なものとなっており、殊更にポレミックなものではない。
- 41) 平井啓之『ランボオからサルトルへ』、講談社学術文庫、1989 年、6 頁〔今日では原本が参照困難である事情に鑑み、読者による確認の煩瑣を軽減するため、引用は講談社学術文庫版の頁数を掲げる〕。なお、ヴァレリーやプルーストを象徴主義の系譜と捉える平井の見解には異論も少なくないことを付記しておく。
- 42) 同、65 頁。
- 43) 同、87 頁。
- 44) 同、264 頁。
- 45) 同上。
- 46) 同、375 頁。
- 47) 前者がベルクソンとサルトルを、後者がブルーストとサルトルを積極的に結びつける著作であるとしている論点についても同様のことが言える。
- 48) 例えば、河合亨「最近フランス文学展望——作家とその動き——」、『饗宴』no.6 所収、日本書院、昭和 22 年 7 月、19-25 頁、安藤孝行「唯物辯證法は革命の神話か」、『評論』昭和 24 年 10 月号所収、河出書房、48-57 頁などを参照されたい。
- 49) サンフランシスコ講和条約が締結されて連合国による占領が終了したのは 1952 年 4 月 28 日である。これと相前後して、サルトルの動向は『新潮』、『世界』、『中央公論』、『文藝』などの雑誌を通じてほぼリアルタイムで知られるようになる。
- 50) その嚆矢として、「実存哲学論争」と題された『理想』1953 年 10 月号、および田島節夫「サルトル——自由——」、原佑編『実存主義』〔講座 現代の哲学 Ⅰ〕所収、有斐閣、1958 年、125-157 頁を挙げておく。
- 51) レヴィ＝ストロースの著作が続々と刊行されて反響を呼ぶのがちょうどこの頃からである（『悲しき熱帯』1955 年、『構造人類学』1958 年、『野生の思考』1962 年）。

付記：本稿は、学習院大学人文科学研究共同研究プロジェクト「明治期以降におけるフランス哲学の受容に関する研究」（平成 16 年度から平成 18 年度）による研究成果の一部である。

ENGLISH SUMMARY

How Sartre was received in Japan: the early years

Yasuhiko MASUDA

This paper tries to clarify how Sartre's thoughts came to be known and studied in Japan. At the time they were introduced into Japan, there were two main difficulties: the subdivided organization of special studies in Japanese academia and the grave situation of the world during World War II.

The introduction of Sartre into Japan began with the sketch or translation of his works. These efforts easily made it possible to treat the works of Sartre as a whole. An assortment of studies appeared such as those which discussed his thoughts on the problematic of *ego* based on Husserlian phenomenology, those which considered his thoughts as an anthropology founded on the relationship between the self and the other, and those which considered him to be a man of letters tackling every kind of task important for the

modern human. Each one of these studies focused on the thinker in its own characteristic way.

However, as Sartre altered the form and content of his works, and was held in high reputation as the intellectual who acts, the studies on Sartre gradually began to move in another direction. They came to project Sartre as an existentialist in the foreground of their interpretations.

Key Words: Jean - Paul Sartre, phenomenology and the self, anthropology, symbolism and existentialism, the intellectual who acts

付録 1 日本語で読めるサルトルに言及した単行本（論集収録分を含む）（1955 年まで）

1939

三木清『構想力の論理 第一』岩波書店

1948

高桑純夫編『自我と實存』白揚社

杉捷夫、渡辺一夫編『フランス文學 新講座 第一巻』丹頂書房〔「ジャン・ポオル・サルトルの〈自由への道〉について」白井浩司〕

森隆編『實存主義者サルトルをめぐる』草美社

松浪信三郎『實存哲學素描』小石川書房〔『実存哲学』河出書房 1955 年〔河出新書〕〕

A・C・F（フランス文化友の会）編『J・P・サルトル』新樹社

植田清次編『現代世界文學展望』統正社〔「マルセル・ブルーストとジャン・ポール・サルトル」河合亨〕

1949

佐藤朔、鈴木力衛編『現代フランス演劇 第一輯』新月社〔「ジャン・ポオル・サルトルと『蠅』」白井浩司〕

フランス文學會編『フランス文學 第壹輯』芝書店〔「J・P・サルトルについて」白井浩司〕

高坂正顕『ケルケゴオルからサルトルへ——實存哲學研究——』弘文堂（1）

白井健三郎『現代フランス文學の課題』福村書店

伊吹武彦『サルトル論』世界文学社

桑原武夫『現代フランス文學の諸相』筑摩書房

1950

R・トロワフォンテーヌ『サルトルとマルセル——二つの實存主義』弘文堂（安井源治）

筑摩書房『哲學講座』第五卷「哲學と文學」〔「サルトル」加藤周一〕（2）

森有正『現代フランス思想の展望』桜井書店

藤野渉『サルトルと唯物論』三一書房

白水社『現代フランス文學——新しい動き——』〔「やぶにらみの哲學と文學——サルトル批判——」（小場瀬卓三）〕

佐藤朔『二十世紀のフランス文學』北隆館

論集『實存主義は是か非か』創元社（伊吹武彦、今井仙一）

1951

筑摩書房『文學講座』第四巻〔「サルトル」白井浩司〕

M・ジラール『現代フランス文學事典』（渡辺淳）

雲の會編『演劇の新風』河出書房〔「ジャン・ポール・サルトル」白井浩司〕

加藤周一『現代フランス文學論』河出書房

1952

P・フルキエ『實存主義』白水社（田島節夫、矢内原伊作）

1953

J・ヴァール『実存主義の人間』人文書院（永戸多喜雄）

1954

- G・ピコン『現代フランス文学の展望』三笠書房（白井浩司）
 金子武蔵『サルトルの哲学——存在と虚無』弘文堂〔アテネ新書〕
 白井健三郎『現代フランス文学研究』未来社
 『岩波講座 文学の創造と鑑賞』第二巻〔サルトル『自由への道』小島輝正〕

1955

- 矢内原伊作『実存主義の文学』河出書房〔河出新書71〕
 河出書房『現代哲学講座』第三巻「実存主義」〔文学的実存主義「サルトル」(白井浩司)〕
 ガロディー他『実存主義批判』青木書店〔青木文庫272〕(加藤九祚)

- (1) 高坂には、同書以前に『実存哲学』弘文堂1948年〔アテネ文庫〕、その直後に『現代哲学』弘文堂1950年〔アテネ新書〕といった著作があるが、いずれもサルトルに言及されていない。
 (2) 『哲学講座』は全六巻。以下にその区分を簡単に記しておく。第一巻「哲学の立場」(1949年12月刊。ハイデガーとヤスパースはここに含まれている)、第二巻「現代思潮」(1950年1月刊。斉藤信治による実存哲学という項目があるが、サルトルへの言及はない)、第三巻「哲学の歴史」(1950年2月刊。ベルクソンはここに含まれている)、第四巻「哲学と科学・宗教」(1950年3月刊)、第五巻(1950年4月刊。サルトル以外では、ヴァレリー、ジイド、マルローらが含まれている)、第六巻「哲学の諸部門」(1950年5月刊。教育哲学、歴史哲学、倫理学、宗教哲学の四部門に分かれている)

付録2 サルトル受容年譜(1950年まで)

	フランス	日本における受容		
西暦	サルトルの作品(翻訳刊行年)	表題名/雑誌名/論者名	作品名/雑誌名	訳者名
1936	L'Imagination (1957)			
1937	La Transcendance de l'ego (1957)			
1938	La Nausée (1947, 51)		『壁』、自由	石川湧
			「嘔気」、セルパン	関水龍
1939	Esquisse d'une théorie des émotions (1957)	「現代フランス小説覚書」、文体、佐藤朔		
	Le Mur (1946, 50)			
1940	L'Imaginaire (1955)	「サルトルについて」、文化評論、佐藤朔	『壁』、中央公論	堀口大学
		★「『エヌ・エル・エフ』論」、改造、河盛好蔵	『部屋』(一)、山の樹	白井浩司
1941			「嘔吐」、文化評論	白井浩司
1942		★「現代佛蘭西哲学管窺」、理想、串田孫一		
1943	L'Être et le néant (1956, 58, 60)		『部屋』(二)、詩集	白井浩司
	Les Mouches (1952)			
1944				
1945	Huis clos (1952)			
	L'Âge de raison (1950)			
	Le Sursis (1951)			
1946	L'Existentialisme est un humanisme (1955)	「フランス文学を語る」、近代文学、座談会*1	『壁』、時論	伊吹武彦

	Mort sans sépulture (1952)	「二流文学論」、改造、織田作之助	『水いらず』、世界文学	吉村道夫
	La Putain respectueuse (1951)	「可能性の文学」、改造、織田作之助	『小説論——ドス・パソスに即して』、世界文学	安井源治
	Réflexions sur la question juive (1956)		『部屋』、思索冬季号	白井浩司
			「サルトルのモーリヤック論」、文学季刊冬季号	杉捷夫
1947	Situations I (1965)	「実存主義の正体」、改造、伊吹武彦	『分別盛り』、社会	堀口大学
	Baudelaire (1956)	「可能性の文学」、世界文学、対談*2	『嘔吐』、青磁社	白井浩司
	Théâtre I	「サルトル観の訂正」、読売新聞、荒正人		
	Les Jeux sont faits (1957)	「サルトルの『水いらず』」、人間、中村光夫		
		「サルトルの思想と作品——『水いらず』について」、文芸、小松清		
		「サルトルの実存主義について」、民主文化、白井浩司		
		「ジャン＝ポール・サルトルの哲学」、哲学評論、E. テッセ		
		★「実存主義の社会的地盤」、展望、大島康正		
		「サルトルの実存主義」、哲学評論、伊吹武彦		
		「外国作家を語る」、世界文学、座談会*3		
		★「最近フランス文学展望——作家とその動き——」、饗宴、河合亨		
		「サルトルの『密房』」、ヨーロッパ、M. ロベール		
		「実存主義は自己主義の私生児なりや」、ヨーロッパ、鈴木力衛		
1947		「サルトルの新作『自由への道』」、世界文学、Time		
		「実存主義はヒューマニズムなり」、世界文学、伊吹武彦		
		「現代フランスの演劇」、朝日評論、M. ロベール		
		「サルトルの存在主義」、『海外文学散歩』、白桃書房、青山行夫		
		「サルトルその他」、新日本文学、中野重治		
		★「実存への関心」、文学、キクチ・ショーイチ		
		「英米のサルトル評」、時事英語研究、山本正喜		

		「カフカに関するサルトルの講演」、ヨーロッパ、E. ドウラン		
		「コミュニズムと人間の自由」、世界評論、座談会*4		
		「ぶろむなあどりてーる」、世界文学、座談会*5		
1948	Situations II (1964)	「サルトルとバスカル」、理想、安井源治		
	Les Mains sales (1952)	「サルトルの見たアメリカ文学」、世界文学、安井源治		
	L'Engrenage (1957)	「ニホンのサルトル」、新日本文学、キクチ・ショーイチ		
		「現実の謀反」、文芸時代、福田恒存		
		「存在の無償性」、文芸時代、福田恒存		
		「サルトルにおける自由とモラルの問題」、世界文学、J. ラクロワ		
		「実存主義——或は夜について——」、人間、矢内原伊作		
		「新しきヒューマニズム」、文芸時代、福田恒存		
		★「「暗い谷間」の賢者たち」、改造、水口伸二		
		「サルトルの二つの新劇」、中国公論創刊号、呉達元		
		「サルトルとエロチスム」、人間美学、小松清		
		「現代文学の課題」、赤門文学、白井健三郎		
		「作家と読者層——サルトルの文学論——」、世界文学、リエフ		
		「主体性論」、唯物論研究、真下信一		
		「サルトルと政治——彼の社会主義運動について——」、個性、小松清		
		「フォークナー論」、世界文学、伊吹武彦		
		「J.P. サルトルのフォークナー論」、アメリカ文学、白井浩司		
		「サルトルの戯曲『汚れた手』について」、ヨーロッパ、R. ケンプ		
		「サルトルの階級性」、文化評論、座談会*6		
		「サルトルのエロティシズムについて」、『好色文学批判』、ロゴス社、河合亭		
		「サルトルの『汚れた手』」、映画芸術、永来重明		
		「サルトル小論——呻きつゝ求める者——」、新文学、安井源治		

		「サルトルの賭について」、世界文学、伊吹武彦		
		★「現代の精神状況」、思想、高桑純夫		
1949	Situations III (1965)	「世界壊滅の文学」、世界文学、D. ロップス	『唯物論と革命 I 革命の神話』、世界文学	多田道太郎
	La Mort dans l'âme (1952)	「J.P. サルトルについて」、フランス文学 1、白井浩司	『唯物論と革命 II 革命の哲学』、世界文学	矢内原伊作
	Entretiens sur la politique	★「現代フランス思想の展望」、展望、M.A.		
1949		★「揺らぐフランスの重心——ベルソナリズムをめぐる——」、改造、E. テッセ		
		「ハイデッガーのサルトル批判」、展望、松本彦良		
		「実存主義とは何か」、新潮、R. カンベル		
		「誰れのために書くか——サルトルの文学論——」、群像、佐藤朔		
		「サルトリアンは共産党の敵か」、リベルテ、松尾邦之助		
		「サルトル論」、世界文学社、伊吹武彦		
		「知識人と政治——サルトルとルウセの立場から——」、個性、梅田晴夫		
		「E. ムニエのサルトル批判」、個性、遠藤周作		
		「サルトルの伯林訪問」、文芸、石上玄一郎		
		「サルトル、アヌイの実験的上演」、テアトロ、中村雅男		
		「唯物弁証法は革命の神話か」、評論、安藤孝行		
		「永遠の文学と現代の文学——サルトルの 20 世紀小説論——」、個性、佐藤朔		
		「革命のプリズム——サルトルとマルクス主義者——」、近代文学、花田清輝		
		★「アメリカで見たフランス哲学界」、展望、串田孫一		
		「労働と実存——サルトル管見——」、立命館文学 70-72、山元一郎		
1950		「ジャン・ポール・サルトル」、理想、伊吹武彦	「誰れのために書くか」、世界文学	伊吹武彦
		「トロツキーは生きている——サルトル、ルカッチ論争——」、世界文学、高田博厚	『文学の国営』、改造	白井浩司
		★「実存と所有」、哲学研究、山内得立	「汚れた手」、中央公論	白井浩司

	「吾々はサルトルを批判する」、世界文学、赤岩栄	『奇妙な友情』、展望	佐藤朔
	「現代フランス文学におけるニヒリズム——サルトルとカミュ——」、風雪、佐藤朔	『エロストラート』、新潮	窪田啓作
	★「フランスの最近十年間 秩序と無秩序」、展望、特集	『自由への道〈分別ざかり〉上』、全集	佐藤朔、白井浩司
	「フランスにおける苦悶の哲学と文学——サルトルとマルロー——」、理想、淡徳三郎	『蠅』、人間	加藤道夫
	「フランスにおける実存主義批判」、理論、三宅徳嘉	『アメリカ論——その個人主義と画一主義——』、群像	佐藤朔
	「サルトルのアメリカ批判」、書物、白井浩司	『自由への道〈分別ざかり〉下』、全集	白井浩司、佐藤朔
	「サルトルのアメリカ論」、人間、加藤周一	短編集『壁』、全集5	
	★「ヒューマニズム問答」、改造、森有正		
	「知識人フロントの伝統」、理想、小松清		
	「フランス知識人の政治化について」、改造、J. メルロ＝ポンティ		
	「実存主義問答」、改造、金子武蔵		
	「サルトルの作中人物」、手帖1、伊吹武彦		
	「サルトルの文学的位置」、手帖2、佐藤朔		
	「『嘔吐』について」、手帖3、矢内原伊作		
	「創作合評」、群像、座談会*7		

*1 河合亨、荒正人、中村真一郎、佐々木基一、加藤周一、埴谷雄高

*2 織田作之助、吉村正一郎

*3 丹羽文雄、石川達三、伊吹武彦

*4 中村哲、赤岩栄、加藤周一、真下信一、野間宏、松本慎一

*5 辰野隆、市原豊太、吉村正一郎、伊吹武彦

*6 真下信一、高桑純夫、松村一人、古在由重

*7 中村光夫、本多秋五、三島由紀夫

参考文献：竹内芳郎、鈴木道彦編『サルトルの全体像』、ペリかん社、1966年
 鈴木道彦、海老坂武、浦野衣子『サルトルとその時代』、人文書院、1971年
 『いま、サルトル——サルトル再入門——』、思潮社、1991年
 別冊「環」サルトル1905-80【他者・言葉・全体性】、藤原書店、2005年
 ★印はこれらの参考文献に記載されていない資料を指す。